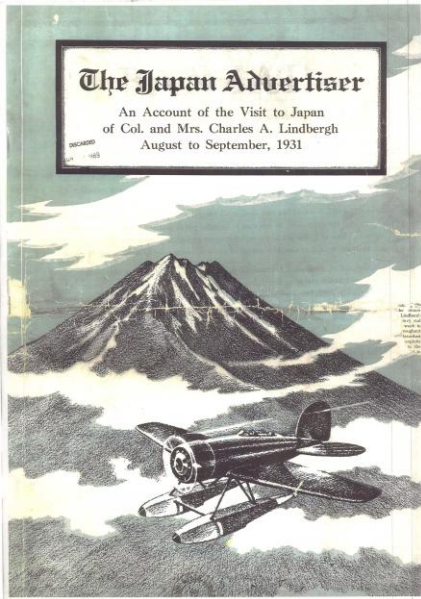




Vol.4

はじめに

《三好企画の web サイトに掲載されている文は全て著作権法により保護されます。日本語訳の著作権は三好企画が保有しています。掲載されている文の閲覧と印刷には制限なく、研究にご利用ください。ただし、全文をコピーして流用すること、改ざんすることはお断りします。

これは 1931 年の日本社会、世界の航空機、航路についての貴重な記録です。論文の部分引用にあたっては、「出典」として下記をご掲載ください。》

『ジャパン・アドヴァタイザー』The Japan Advertiser 1931 年 10 月 10 日、ジャパン・アドヴァタイザー発行 日本語訳・三好企画 2025 年

アメリカで出版されたアン・モロウ・リンドバーグ著『海からの贈り物』（1955 年）の 70 年目の記念として、まずは一部を公開します。

凡例

〔 〕 及び * のある部分は、訳註である。
原文は英語なので、漢字表記が不明のものはカタカナにした。

原版はタブロイド判 32 ページ、報道内容が重なった部分があるので一部を割愛した。

翻訳協力 順不同、敬称略

リーヴ・リンドバーグ 兼子 奈緒美 中川 経子 浅野 正弘

1931年9月1～6日

リンドバーグ夫妻、軽井沢と日光で休養の日々

9月1日は東京を出発して高原の避暑地に向かう。
5日まで滞在。その翌日、日光に立ち寄り東京に戻る。

9月1日の午後4時10分、リンドバーグ大佐と夫人は東京から車で軽井沢に到着すると、すぐにオザキ荘に向かった。アメリカ大使がこの高原の避暑地に滞在する夫妻のために、大使自身の別荘を提供してくれたのである。軽井沢の住民はこの高名な夫妻の訪問に熱烈な関心を示し、街の通りには一日中群衆があふれ、また人々は連れ立って、リンドバーグ夫妻が到着しそうな時刻を尋ねに、次から次へと駅を訪れた。

リンドバーグ大佐も夫人も、東京からのドライブを楽しんでいると、口をそろえて言っていた。道は快適で天気も良く、夫妻は目にはいる道路沿いの景色もまた大いに楽しんだ。とりわけ、高崎で受けた心づくしのもてなしには大喜びだった。一行は昼食をとるために高崎に立ち寄り、《炙ったウナギとご飯》のご馳走、名物の鰻の蒲焼きを味わったのだ。

避暑地の群衆を避ける

高崎を出発すると、一行は町を出てすぐのところに架かっている大きな橋を渡り、そこから碓氷峠を越える長い登り坂に入った。軽井沢のはずれまでやってくると、東京からリンドバーグ夫妻を乗せてきた車はトンネルをいくつか抜けた後、幹線道路をはずれて景勝地の通りから街へと進んだ。このようにして、避暑地軽井沢の駅と中心街に集まっていた群衆を避けたのだった。車は万平ホテル通りの下を通り過ぎるとテニスコートの横を抜けて軽井沢に入り、郵便局近くの街角を曲がって坂道を登り、頂にあるオザキ荘に向かった。麓の街に集まっていた人々はリンドバーグ夫妻の姿を一目も見る事が出来ず、がっかりであった。

到着するとすぐ、リンドバーグ大佐は少し昼寝をするために部屋に引き下がり、リンドバーグ夫人は克蘭フォード夫人、メレル・ベニンホフ夫人と一緒に散歩に出かけた。

9月2日、リンドバーグ夫妻は新渡戸稲造博士夫妻が2年前、サンドウヤマに夏の別荘として建てた新渡戸荘に、午餐会の主賓として招かれた。夜には、アメリカ大使とジェイムズ・F・ラッセル夫人が少人数の友人を招いて開いた、打ち解けた雰囲気夕食会に招待された。それ以外には、リンドバーグ夫妻は静かな一日を過ごした。一方、街の人々は夫妻の姿を一目見たいと、そわそわとした落ち着かない一日を過ごした。

新渡戸邸での午餐会に先立ち、リンドバーグ大佐夫妻は、アメリカ大使とラッセル夫人と共に軽井沢にある埴原正直夫妻宅を訪問した。埴原氏は元駐米日本大使である。埴原氏はこの冬は、病で臥っていたが、今はすっかり回復している。

打ち解けた雰囲気の日食会

東京でリンドバーグ夫妻のために催された公式行事と比べると、新渡戸邸の午餐会は非常に打ち解けた雰囲気の集まりだった。博士の別荘の建築様式は和洋折衷で、野の花で風雅に飾られていた。午餐会のテーブルの上にはあふれんばかりの金蓮花きんれんかが生けられていた。

午餐会のあいだに、浅間山が小規模の噴火を起こして活火山である証拠を示したので、リンドバーグ夫妻はよりいっそう軽井沢らしい雰囲気を楽しみ、活火山がいつも目の前にある興奮を味わうことができた。

主賓のほかに新渡戸邸の午餐会に出席したのは、アメリカ大使、ジェイムズ・F・ラッセル夫人、宮内次官・関屋貞三郎氏、レンゴウニュース社長イワナガ・ユウキチ氏、前農林次官で現在は日日新聞社副社長の岡実博士、著名な女性教育学者ニシカワイ女史、尾張徳川家の徳川義親侯爵、そして新渡戸琴子夫人である。

午餐会のあとで、新渡戸博士と夫人の友人が大勢立ち寄った。なかには、F・H・ウェイン・ライト氏、ジョン・ストラザー夫妻、帝国大学のコナス博士、ノグチ・イサム博士がいた。

その晩、アメリカ大使がリンドバーグ大佐夫妻に敬意を表して催した夕食会に出席した招待客のなかには、J・G・マッキロイ陸軍大佐夫妻、エドウィン・L・ネビル夫人、T・アサブキ夫人、B・W・フライシャー夫妻、そしてトーマス・克蘭フォード・ジュニア中尉夫妻がいた。

午前中、リンドバーグ夫人は克蘭フォード夫人、メレル・ベニンホフ夫人、デニス夫人と連れ立って街にある店を何軒も見てまわった。リンドバーグ夫人は骨董店にとりわけ興味をもったようだった。

9月3日の午後、軽井沢避暑地団がリンドバーグ大佐夫妻に敬意を表して開いた歓迎会は、きわめてのびのびと打ち解けた雰囲気の催しだった。特に避暑地の子供たちは、憧れの英雄夫妻に紹介され、実際に握手までしてもらい、生涯忘れがたい興奮を味わった。リンドバーグ夫妻の思いやりにあふれた魅力的な振る舞いに、この催しに集まった600名以上もの避暑地の人々もまた魅了された。出席した人々の国籍は様々であり、軽井沢在住のアメリカ人だけでなく、多くの日本人とヨーロッパの国の人々が集まった。

歓迎会は、軽井沢ホテルの大食堂で4時30分から始まった。軽井沢の地元の人々が街の通り沿いで、また、屋根で覆われたホテルの玄関で、喝采の声をあげて、リンドバーグ夫妻の到着を知らせた。夫妻はホテルの正面にある大名庭園の中をとおっている短い車道をぐるりとまわってやってきて、歓迎会運営委員会一同から熱のこもった出迎えを受けた。大食堂に入ると、リンドバーグ大佐夫妻は、並ならぬ平静さと辛抱強さを発揮して、1時間近くも崇拜者たちと握手を交わしながら避暑地団の会員を全員迎えた。

打ち解けた雰囲気歓迎会

この歓迎会は、リンドバーグ夫妻が来日して以来受けてきた数多くの歓迎会のなかでも、きわめて打ち解けた雰囲気の催しだった。嬉しくもあり、いささか畏敬の念を抱きつつ、年少女たちは新しい曲を披露した。招待客がやってきた時、リンドバーグ大佐夫妻とともに出迎えの列に加わっていたのは、軽井沢避暑地団の会計係、R・D・マコイ氏、会長のJ・G・ダンロップ氏、アメリカ大使、ジェイムズ・ラッセル夫人、R・D・マコイ夫人、そしてJ・G・ダンロップ夫人である。

委員会の担当者は、リンドバーグ夫妻に挨拶をすることを希望する来客を、出迎えの列に案内した。この委員会のメンバーは、福井菊三郎夫人、H・B・ベニンホフ夫人、G・S・フェルプス夫人、T・アサブキ夫人、メルル・ボリーズ夫人、アリシア・ブリッジス夫人、J・J・チャップマン夫人、そしてH・H・マンロー夫人である。軽井沢避暑地団の3名の役員が来客の列の整理にあたり、また、歓迎会全般の進行を手伝った。この役目を担ったのは、メリス・ボリーズ氏、O・D・ピクスラー氏、そしてH・メレル・ベニンホフ氏である。

出迎えの列が来客に挨拶をしている向かい側の壁に沿って長テーブルが置かれ、そこでお茶が振舞われた。給仕にあたったのは、フロイド・シャックロック氏とバー吉ニア・マッケンジー嬢で、軽井沢避暑地団の少女10名が二人を手伝った。

歓迎会に多数の参加者

この歓迎会には、スイス公使エミール・トラベルシーニ氏、また、アイザック・C・ジョンソン海軍大佐、フランツ・B・メレンディ海軍少佐、ジェイムズ・G・マッキロイ陸軍中佐および夫人、エドウィン・L・ネビル夫人、トーマス・G・克蘭フォード・ジュニア中尉および夫人、H・メルル・ベニンホフ夫人、そしてその他大勢をはじめ、軽井沢逗留中のアメリカ大使館関係者も全員参加した。

その日の午前中、リンドバーグ夫人は静かな時間をすごした。リンドバーグ大佐はベニンホフ氏と共に軽井沢ホテル内のアメリカ大使館を訪れたが、間もなくオザキ荘に戻った。昼には、夫妻の滞在先で内輪の昼食会が開かれたが、この別荘に滞在しているアメリカ大使、

ジェイムズ・ラッセル夫人、そして克蘭フォード中尉夫妻以外の出席者は R・F・モス夫人だけだった。

夜もまた別荘で夕食会があったが、招待客はその日の午後、軽井沢に到着したリリアン・ミラー嬢だけであった。

その日の午後、リンドバーグ大佐夫妻は友人として新渡戸博士夫妻宅を訪問した。日本の生活のさまざまな局面と絵画や詩について語り合った。その訪問中、リンドバーグ夫妻は日本人の人々について熱心に知ろうとしていた。

9月4日の午前中、夫妻の到着以来、初めてまずまずの天気になったので、リンドバーグ夫妻はこの機会を利用してサンセット・ポイントに出かけ、素晴らしい眺望を堪能した。晴れた日には、この場所から7つの山並みを見ることができる。

夫妻は昼食会のためにアメリカ大使の別荘にもどった。昼食会の招待客は、大使館付海軍武官アイザック・O・ジョンソン大佐とウィリアム・ジョンソン氏、そしてマージョリー・サリバン嬢だった。午後、リンドバーグ夫妻はトーマス・G・克蘭フォード中尉と夫人、そして週末にかけてアメリカ大使の別荘を訪れていたリリアン・ミラー嬢と共に、浅間山の溶岩石を見るために車で出かけた。夜はアメリカ大使の別荘で夕食をとったが、招待客は E・L・ネビル夫人だけだった。

大佐と夫人が軽井沢に到着して以来、報道カメラマンと地元のプロのカメラマンは夫妻の周囲で待機し続けたが、リンドバーグ大佐夫妻が正午少し前にアメリカ大使の別荘の庭での写真撮影に同意したとの通知がカメラマン全員に送られた。指定された時刻のずっと前からカメラマンたちが集まりはじめた。やってきたのは報道関係者とプロのカメラマンだけではなく、大きさも種類もさまざまなカメラを所有しているか、借用することのできた軽井沢の人々のほとんどがいた。この時撮影された写真の何枚かが、特別な速さで現像され、午後の早い時間には街の店先に飾られた。

リンドバーグ夫人は、B・W・フライシャー夫人が軽井沢で催した、少人数の内輪の午餐会に主賓として招待された。招待客は、徳川頼貞侯爵夫人、前駐米日本大使埴原正直夫人、岩倉公爵の義理の姉妹にあたる岩倉夫人、外務省通商局長武富氏夫人、三井合名会社常務理事福井菊三郎氏夫人、福井若夫人、三井男爵令嬢タカツジ夫人、ジェイムズ・ラッセル夫人、リリアン・ミラー嬢などだった。テーブルは盆栽の松や、草花に覆われた、岩や丘を模した絵のように美しいミニチュアの風景で飾られ、根室湾に着水したリンドバーグ機らしい小さな飛行機が置かれていた。

9月5日、リンドバーグ大佐夫妻は車で軽井沢を出発した。そのまま東京に戻るものと思われていたが、夫妻はそうせずに日光に向かい、そこで一泊した。

自由に使えるようにと、フォード社が提供してくれた新車のリンカーンで、リンドバーグ大佐夫妻はトーマス・克蘭フォード大尉夫妻とともに、日光に3時に到着した。一行は直接金谷ホテルに向かったが、人々の不意をついた訪問だったので大勢の群集に悩まされることはなかった。短い休息のあとで一行は東照宮を訪れ、またホテルに戻って一晩を過ごした。

9月6日、リンドバーグ大佐夫妻は東京にもどった。一行は東京で滞在先としていたルドルフ・B・トイスラー博士の家にまっすぐ帰った。昨日、夫妻の到着時刻と移動経路が前もって知らされていなかったため、東京に最初に到着した時のような、通りに溢れる大群衆には遭遇せずにすんだ。

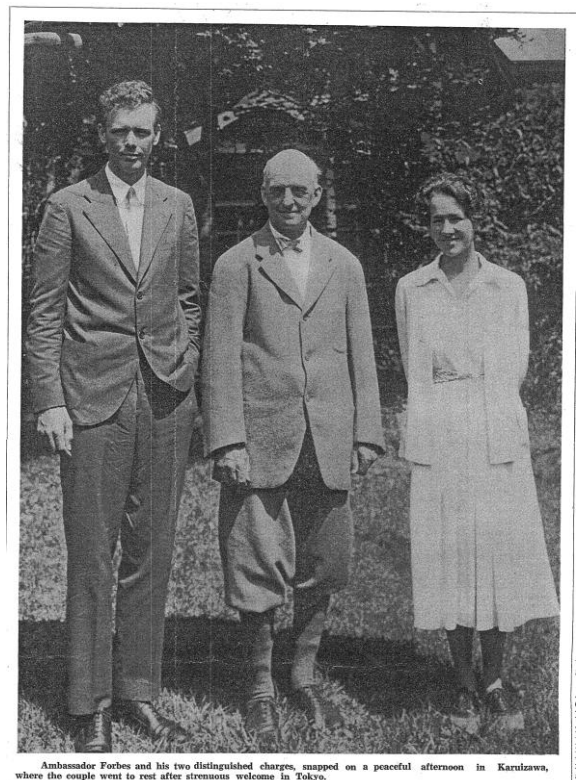
9月6日、大佐と夫人は、外務大臣・幣原喜重郎男爵が主催した園遊会に主賓として招かれた。築地のトイスラー邸で短い休息をとったのち、リンドバーグ大佐と夫人は3時30分に駒込の幣原男爵邸を訪れた。園遊会には多くの名士が招かれており、なかには、アメリカ大使W・キャメロン・フォーブス氏、ジェイムズ・ラッセル夫人、アメリカ大使館職員14名、そして外務次官永井松三氏および夫人をはじめ、大勢の日本人名士がいた。

リンドバーグ大佐夫妻が日本の文化に興味を持っていることは明らかだったので、園遊会の主催者はコモリ式の茶の湯の実演を行った。その後、日本の木管楽器である尺八の有名な奏者、吉田晴風とその一座による演奏などの演目が披露された。

【写真説明】

フォーブス大使、大切な客人二人と。

軽井沢で過ごす穏やかな午後のひととき、嵐のような歓迎をうけた東京を離れ、夫妻は休養した。





Mrs. B. W. Fleisher was hostess to Mrs. Lindbergh at an informal luncheon at her summer home in Karuizawa. Those shown in the photograph above are Mrs. K. Fukui, Jr., Mrs. Takatsuji, Mrs. K. Fukui, Miss Lillian Miller, Mrs. Taketomi, Mrs. Iwakura, Mrs. Lindbergh, Mrs. James F. Russell, Marchioness Y. Tokugawa and Mrs. B. W. Fleisher.

【写真説明】

B・W・フライシャー夫人はリンドバーグ夫人のために軽井沢の別荘で内輪の昼食会を開いた。上の写真はK・福井若夫人、タカツジ夫人、福井菊三郎氏夫人、リリアン・ミラー嬢、武富夫人、岩倉夫人、リンドバーグ夫人、ジェイムズ・F・ラッセル夫人、徳川侯爵夫人、B・W・フライシャー夫人。

【写真説明】

田舎でのかなり穏やかな生活。アメリカ大使館女主人のジェイムズ・F・ラッセル夫人と写真に収まるリンドバーグ夫人。ひっきりなしの歓迎行事を逃れて軽井沢滞在中に。



Hostility and comparative peace. Mrs. Lindbergh photographed with Mrs. James F. Russell, hostess of the American Embassy, during the Karuizawa interlude which broke the round of entertaining for the flier.



Perhaps the best Lindbergh portrait taken in Japan. The Colonel was snapped beneath the trees in the garden of the Ozaki villa in Karuizawa, which he made his home during his brief stay there.

【写真説明】

日本で撮られた写真の中で、ベスト・ショットではないだろうか。軽井沢で滞在していたオザキ荘の庭の木の下で。

私たちはやってきた

以下は8月27日付『ジャパン・アドバタイザー』の社説である。

「私たちはやってきた」これは、1927年5月21日、ニューヨークからの画期的な単独飛行の後、パリ近郊のルブールジェにスピリット・オブ・セントルイス号を無事着陸させたときに、リンドバーグ大佐が述べた言葉である。わたしたちというのは、飛行機と大佐自身のことである。自身の偉大な冒険について語るとき、また文字にするとき、大佐は常に「私」ではなく「私たち」という言葉を使っている。謙譲の美德は大佐に対する賞賛の中でも、薄れることのない、際立った特質のひとつである。

今回の「私たち」は、それとは異なった意味合いを帯びている。日本に到着したリンドバーグ氏と夫人、そして飛行機のことである。夫妻は飛行してきたルート上の経由地と同様に、日本でも暖かい歓迎を受けた。何故なら、二人はアメリカを代表する最も有名な夫妻だからだ。

今回のニューヨークから東京への飛行が成功という結果に終わったことは、なんら驚くにあたらない。大方の予想通りである。千島列島上空を飛行中、困難に見舞われて何度か不時着の憂き目を見たときには、夫妻の身が案じられたこともあったが、その事態も、リンドバーグ大佐の能力と決断力、そして若い夫妻の勇気と決意を証明する、最高の機会となっただけだった。どのような状況でも平静さを失わない夫妻の姿は、世界中の人々に感化を及ぼしている。

今回の旅に出発したとき、リンドバーグ夫妻には定まった旅程はなかった。リンドバーグ大佐は出発前からこの点について明言しており、その後も、今回の旅は「無理せず、ゆっくり」を基本とする休暇旅行であることを、何度も繰り返し述べている。ワシントンを発つ前の会見でリンドバーグ大佐は、太平洋で霧に見舞われたらどうするのかと質問された。「霧がでたら、着陸して晴れるのをまつだけです」というのが大佐の回答である。

この流儀で、夫妻は今回の旅にとりかかったのだ。リンドバーグ大佐は、飛行機が信頼できる交通手段であることを信じているが、その限界も知っている。飛行は天候に左右されるものであり、飛行機による旅には慎重な計画と準備が必要であることを理解しているのだ。今回の飛行は、熟練者が操縦した場合の飛行機の将来性を明示するものとなった。

リンドバーグ大佐が突如その名声を博し、アメリカで偶像視されるようになって以来、この4年間、大佐の人気は衰えることがない。ニューヨークからパリへの飛行は人々の心を魅了し、当代の他の偉業のなかで、これほど人々が心を奪われた出来事はほかにないが、それだけが理由ではない。大佐自身の人柄なのだ。リンドバーグ大佐の友人であるフィッツヒュ

ー・グリーンは、衰えることのないこの人気の理由を突き止めようと、次のように語っている。

「リンドバーグの逸話が独特である理由は、パリのあの闇夜、ルブールジュの飛行場に大佐の飛行機が着陸したとき、リンドバーグがさらに前進を続ける男だった点にある。リンドバーグをめぐる一連の現象は大西洋横断によって始まった。だがこの現象全体は、あたかもリンドバーグが全く飛んでいないかのように、あの飛行とは全く別個のものと言ってもよい。これほどリンドバーグ支持されている理由は、その謙虚さか、容姿か、金銭や名声の話に対して距離を置いているからなのか、それはわからない。おそらく、魅力的な微笑を浮かべて大空を駆け巡る若者と、ひとときでも日常の仕事や政治、犯罪などの不快なことがらを忘れさせてくれる輝かしい偉業に対して世の中の機が熟していたのだろう」

先の駐仏アメリカ大使マイロン・ヘリックはあの有名な夜、リンドバーグがパリに到着したときに世話をした人物であるが、その1周年に次のように書いている。

「もしリンドバーグがこのような男でなかったら、この功績も、スポーツ選手の功績と変わらないものになっていたことを、みんなに知ってもらいたい。この1年、世界中が賞賛を送り続け、また、ヨーロッパへの飛行の実質的な継続というたゆみない努力をリンドバーグがしてきた後で、この若者が優秀な飛行家としてだけではなく、とりわけ、リンドバーグ自身の優れた人格という力で尊敬を勝ち得続けていることを知って満足している。そして一年たった現在、リンドバーグは依然として勇敢な飛行家であり、アメリカ人の理想と人格と品行の立派な手本である。」

パリ飛行後の4年間、リンドバーグは飛行のために全霊を傾けて専念してきた。リンドバーグは名声を得たことにより、自身の生業である飛行機に対する関心を高めるより多くの機会を持つことができた。大西洋飛行の後、リンドバーグはアメリカ国内をまわっただけでなく、1年もたたないうちにメキシコと中央アメリカ縦断飛行を行っている。1928年、リンドバーグはトランス・コンチネンタル航空会社の技術委員会の責任者に着任し、1929年から1930年にかけては、パン・アメリカン航空会社のために航空郵便の空路をふたつ開拓し、カリブ諸島とメキシコ湾上空を飛行した。

リンドバーグがアン・モローと結婚したのは3年前である、夫人は前駐メキシコ大使モロウ上院議員の令嬢で、飛行における名高い協力者でもあり、人々の尊敬の的となっている。リンドバーグ夫人はその夫と同様の性質の持ち主であることを証明している。夫人は、夫と同じ大胆さ、勇敢さ、そして謙虚さを示し、これらの性質ゆえにアメリカ国民から深く尊敬されている。夫人は手がけた仕事を完遂する夫の能力に全幅の信頼を寄せている。リンドバーグ夫人自身、優秀なパイロットであり、自分の飛行機を定期的に操縦している。昨年、リ



ンドバーグ夫妻はアメリカ合衆国の西海岸から東海岸まで、記録的な無着陸飛行を成功させた。

今回の旅行中、リンドバーグ夫妻は試験と困難を共に分かち合った。リンドバーグが飛行機の操縦を担当する一方、夫人は無線機の操作を行った。二人は今回の飛行を「休暇旅行」と称している。夫と妻が空路による旅に、これほど強い決意をもって臨んでいるという事実は、夫妻の飛行機志向の程度を示すものであると同時に、高まりつつある飛行機の信頼性を世界のひとびとに印象づけずにはいられないだろう。

夫妻は、この遠く離れた日本の岸边を訪れたことにより、二人が橋を架けた太平洋で隔てられたアメリカと日本の、より親密な関係構築に貢献するだろう。何故なら、二人はアメリカ国民が認めた特別な親善大使だからだ。

【写真説明】

左上：大阪の木津川飛行場で。飛行機は船舶用栈橋にたどり着いた。

右上：大阪に到着。

中央左：神戸米国領事E・R・ディックオーバー氏は大阪でリンドバーグ夫妻を出迎えた。

ボタンホールにバラ飾りをつけている日本人は飛行場長の佐々木氏。

中央右：リンドバーグ夫人とディックオーバー氏。

左下：大阪でスピーチをするリンディ。

右下：大阪の岸边に接近する飛行機。到着を待ち受けていた数千人の群集の一部が後方に見える。